

金融資本と銀行資本

鈴木, 芳徳

<https://doi.org/10.15017/2920531>

出版情報 : 経済論究. 12, pp.23-37, 1963-01-24. 九州大学大学院経済学会
バージョン :
権利関係 :

金融資本と銀行資本

鈴木 芳 徳

(1)

金融資本なる概念は、周知の通り、ヒルファディングおよびレーニンによつて与えられたものであるが、最近にいたつて、こうした金融資本などというものは存在しない、あるいは、かつては存在したにしても現在は存在しないとす
(註1)
る見解が、いくつか現われている。

たとえば、アメリカの経済学者、J.K.ガルブレイスは、その著書「アメリカの資本主義」の第九章を「平衡力の理論」と題し、金融資本から大企業へという歴史的発展を、次のように説明している。

「それまで全能と考えられていた銀行家が実は全く無力であつたことが1929年の崩壊で明らかになつた」のであつて、現在では「アメリカ経済における少数の大会社の重要性については、誰もこれを否定することはできない。」そして「理論の上では、アメリカ人は、生活も魂も大会社によつて支配されている。」

「経済力の象徴としての銀行家の影がうすれると、その地位は巨大な産業会社によつてとつてかわられることとなつた。この入れ替りは好ましいものであつた。権力と銀行家とを結びつけて考えることは、マネー・トラストというものに対する微妙な信念に基づいている。つまり事業の開始や拡張を賄う金融力が少数者の手中に握られているという考え方である。この考え方の源は、金融資本に関するマルクスの教義である。しかしそれは少なくともアメリカにおいては、統計的にも、またその他の経験によつても立証し難い。」

ガルブレイスが、ここで金融資本をマルクスの与えた概念だとしてい
(註2)
るのは、もとより誤りで、これは、ヒルファディングないしはレーニンの与えたものとするべきであろうが、しかし、いずれにせよ、ガルブレイスによれば、金融資本の時代とは過ぎ去つた一時期にすぎず、現在はむしろ大企業の時代だと

いうのである。

(註1) Rudolf Hilferding, *Das Finanzkapital*, (1910), N. Lenin, *Der Imperialismus*, (1917)

(註2) J. K. Galbraith, *American Capitalism, The Concept of Countervailing Power* (1952) 藤瀬五郎訳「アメリカの資本主義」なお、こうした思考は、かなり広く認められる。たとえば、Thomas C. Cochran, *The American Business System*, (1957) 中川敬一郎訳「現代のビジネス・システム」、Herrymon Maurer, *Great Enterprise*, (1955) 柳下勇訳「大企業」などがある。またこれらとの関連で、E・ヴァルガ「20世紀の資本主義」鶴田三千夫訳161ページを参照。

こうした歴史の見せた変化の側面を重視して、その展開を、いくつかの歴史的段階に区分して理解しようとする一連の思考が、かなり以前から現われていた。たとえば、ジョージ・エドワーズは、1938年に出版した「金融資本主義の発展」において、世界の金融資本主義の発展を研究し、その段階的発展について、次のようにいう。

エドワーズによると、「資本経営と投資銀行業との金融的関係の展開は、いつぱんに三つの段階を経過する」のである。第一の段階を説明して、次のようにいう。

「特定の会社・産業においては、あるいは経済制度として考えてみても、その歴史の初期における資本経営と投資銀行業との関係は一般に無視しうる程度のものである。産業は、その収益の再投資によつて、自己で内部的に金融する」のであつて「出来てまもない会社や未熟な産業や新しい組織にとつては、公衆に証券を売つてその成長のための資金を集めようとしても、不可能なのである。」

第二段階については、次のように述べられる。「時の経過につれて、特定の会社、産業、また組織の活動が利潤を生むものとなるならば、その成長のための資金を、証券販売によつて得られるだけの、極めて強固な地位を確保するようになる。この時点では、経営と投資銀行業との間の密接な関係が発展しうる。この結びつきは、必然的な結果ではない。というのは、もし会社の要求がさせまつたものでないならば、経営はその業務の支配力をそのまま留保しておくんだらうからである。それだけでなく、19世紀の英国の場合のように、市場で

の資本の供給が豊富であるときにも、同様の結果となるであろう。非常に急速な拡大が行われたために、会社が、大量のそして継続的な資本の供給を必要としている場合には、そして利用可能な資本の供給が制限されているならば、投資銀行業者は会社の業務運営に対する支配力を十分に獲得する。こういう条件は、ドイツの19世紀の最後の四半世紀における産業の急速な拡大期に顕著であった。」

また、第三段階について、「一国が、経済的成熟の時期に達すると、会社によつて直接所有される資本資金の供給が増大し、そしてこのような条件の下では、その供給は、あまり投資銀行に依存しない。同様に、利潤の増加は、収益の再投資によつて経営の拡大のために金融することを可能とし、その結果、投資銀行の産業に対する支配は弱められる。」

(註3)

(註3) George W. Edwards, *The Evolution of Finance Capitalism*, 1938, p. 4~5. なお、エドワーズは、金融資本主義という語の使用は、通俗的用法にしたがつたまでで、自分の書物は本当は証券資本主義 (security capitalism) の研究と題されるべきだと述べている。このエドワーズの発展段階と同様の思考は、H. Parker Willis and J. I. Bogen, *Investment Banking, Revised Edition*, 1936, p. 286 にも見ることができる。そこでは、同様の三段階が想定され、各産業が、この三段階を経過することが述べられている。なお、こうした段階的発展の思考は、H. Grossmann, *Das Akkumulations-und-Zusammenbruchsgesetz des kapitalistischen Systems*, 1929 (有沢・森谷訳, 741ページ) におけるものが、最初のように思われる。

ところで、こうした変化は、かつてのヒルファディングの周知の主張とはあいいれないものとして、ヒルファディングに対する批判が生じて来た。グロスマンは、そのこう矢をなすものであつたが、かれはヒルファディングを批判して、次のようにいう。

第一に、ヒルファディングは、流通部面に決定的な意義を与えているとして「それは、マルクス説の基本観念とも相容れないものである。何故とならば、銀行による産業支配についてのヒルファディングの主張にして若し正当だとしたならば、資本主義の姿態形成上における生産行程の決定的意義を主張するマルクスの学説は、ために震撼されることになるであろう。けだし、この決定的意義は、ヒルファディングによれば、生産行程即ち産業に帰せしめられないで

金融資本に、それ故流通部面の姿態形成に帰せしめられているからである。」

また第二に、こうした銀行優位は、歴史のある一時期の出来事ではないとして、いう。「ヒルファディングの述べた銀行の優越ということが資本主義の或る特定の一時期について妥当するものであることは、もとより異論なきところである。だが、その優越たるや単に資本主義発達的一定段階にのみ照応するものであつて、ヒルファディングの主張するが如く資本の『歴史的傾向』を特徴づけるものでは決してないのである。」
(註4)

(註4) グロスマン、前掲邦訳、743～4ページ。なお、これにつづけて発展の三段階にふれられているが、その段階区別のやり方は、エドワーズの場合と異り、(1)銀行優位、(2)自己金融、(3)他産業への進出の三段階に分けられている。しかしなぜ歴史の一時期にそうした銀行優位が必然となるかという点は、必ずしも明確には述べられていない。

こうしたグロスマンの主張は、その後、ポール・スウィージーによつて継承された。スウィージーは、ヒルファディングを批判して、云う。

「ヒルファディングの理論が、普遍的な妥当性をもつものでないことは注意しておかねばならぬ。……第一次大戦に先だつ時期の事実には大体においてヒルファディング流の理論が非常によくあてはまる」のであるが、「ヒルファディングは、資本主義発展の過渡的段階を持続的傾向ととりちがえている」のであつて、こうした「金融支配の先入観は蓄積過程の最近のもつとも重要な変化、ことに会社の内部金融の増大にたいする理解を妨げる。」

スウィージーのこうした見解をささえる具体的な史実の分析は、その著書「歴史としての現代」の第11章「投資銀行家の全盛時代」、第12章「アメリカにおける利益集団」および第13章「投資銀行家の没落」の三章にわたつてのべられており、その中心論点は、投資銀行家の没落原因の究明にあつた。それは、スウィージーによると次の四点に要約されるものようである。

1. 経済の拡張の速度が急激に落ちたこと。
2. 現実生じた経済の拡張と新産業の発展とは、はじめから既存の大会社の支配下であり、これらの大会社は莫大な内部資金源を擁していたので、広く資本市場に頼る必要はなかつたこと。

3. 機関投資とくに生命保険の発展が、新規証券市場の買手側の事情を完全にかえしてしまつたこと。このことから自力発行が発達したこと。

4. ニューデール下に設立された復興金融会社の役割の増大。

かくて、スウィージーは、「金融資本」という概念の放棄を主張して、次のようにのべている。レーニンの理論によれば、「たしかにヒルファディングの理論にむけられた批判を免れることができる。それでもなお、『金融資本』という用語から、ヒルファディングがそれに与えたような銀行家の支配という内容をとり除きうるかどうかは、疑問の余地がある。こういう事情であるから、その用語は全然やめて、その代りに『独占資本』という用語でおきかえる方が適切であるようにおもわれる。」

(註5)

(註5) Paul Sweezy, *The Present as History*, 1953, 都留重人訳「歴史としての現代」第七章, および *The Theory of Capitalist Development*, 1942, 中村金治訳「資本主義発展の理論」第十四章を参照。スウィージーの掲げる四つの原因のうち、最も重要とみられる第一の原因について、詳しい説明が欠けている。またスウィージーにあつては、所有側面ないし株式擬制資本の役割について、適切な評価がなされていない。なお、スウィージーにたいする批判として、V. パーロ「最高の金融帝国」があるがいまはふれない。

(2)

スウィージーのこうした結論については、既にかなり多くの批判が提出されているが、古賀英正氏の「支配集中論」に示された批判は、いちおうの解決をめざすものとして、代表的なものと考えられよう。

古賀英正氏によれば、スウィージーの誤謬の根源は、金融資本を、銀行資本の産業資本に対する支配ととらえた点にあり、そのいみでは、そもそもヒルファディングおよびレーニンの概念づけそれ自体が誤つているのだとされる。しばらく、古賀英正氏のいわれるところを聞くことにしよう。

「銀行と産業との融合が問題となるとき、両者のその時の支配団の利害は対立するものであるか？答は『否』である。利害の根本的対立なきが故にそれは『融合』しているのである。これを最も明白に示すものは、銀行の支配者が同

時に産業の支配者である場合である。」「要するに、産業と銀行とは、独占成立の過程において、各々の力に応じた形態において結びついて、金融資本となつたのである。……転化の個々の過程において、何れが主導性をとつたかは、唯沿革的な差にすぎず、成立したものは等しく金融資本である。」
(註1)

銀行優位の姿は意識的に軽視され、産業が優位にたとうが、銀行が優位にたとうが、それはただ、沿革におけることにすぎず、いずれが支配するにせよ、「融合」にちがいはない。いずれにせよ、出来上つたものは金融資本なのであり、金融資本が現在はない、などというのは誤りで、現在こそその時代なのだ、と云われるのであろう。こうした主張は、既にみたガルブレイスらに対する批判としては、まことに有力なものでありうるかもしれない。

しかし古賀氏にあつては、産業と銀行の融合という横の関係と、株式擬制資本による両者の共通支配という縦の関係が、想定されているのであるが、この両者の有機的関連はいつこう明確でなく、ここに後続する諸説が、銀行と産業の融合という内実を捨てて、単なる株式会社論へと向う原因があるように思われる。

しかも、銀行優位などということは、ただ沿革期のことにすぎぬとして、金融資本の完成姿態にのみ目を向けられるのであるが、融合一般というような緩い概念を用いて、生成過程における固有の姿を包括し、融合一般のなかでのたんなる内部分類として取扱うだけでは、説得的ではない。主導権の所在いかん、そしてその必然性については、考えてみるほどのことはないのだろうか。「銀行の新しい役割」のごときに一章をさくほどのことはなかつたのだろうか。金融資本という概念についての、その生成の序次と後次する展開といったことについて、十分な説明が要求されるのは、当然であらう。

(註1) 古賀英正「支配集中論」79ページ。なお同様の叙述は、「日本金融資本論」第一章にもみうけられる。これと相似た整理の方法は、佐藤定幸「金融資本概念にかんする一考察」(一橋大学「経済研究」九の2)にもみられる。そこでは、「金融資本の本質は、資本主義的独占に立脚した銀行資本と産業資本の融合である。……われわれにとつて重要なのは、金融資本の本質の検出なのであつて、銀行資本の支配という形態の検出そのものではない」と述べられている。

こうした見解にやや類似して、静田均氏は次のように述べられている。「銀行による産業支配という規定は、『金融資本論』の中におけるむしろ小乗的な教義にすぎないのではあるまいか。」金融資本というのは「ひつきようするにコンツェルンであり、スイージーのいわゆる利益集団にほかならぬ、といえよう。……わたくしは、そこにヒルファディングの金融資本に関する大乘的規定を見出すことが出来る、と考えられるのである。」

(註2)
また、最近の論文では、次のようにのべられている。

「コンツェルンが大きくなればなるほど、傘下の諸企業を支配し、統轄する中枢機関が必要となじてくる。屋根会社とか管理会社とか持株会社とか呼ばれるところのものがすなわちそれである。……しかしそれは必ずしも銀行ではない。銀行資本と産業資本の融合とか癒着とかいうことにあまり囚われすぎると、かえって実体把握の障害となるおそれがあるようにわたしは考えるのだがどうであろうか。」

(註3)

(註2) 静田均「金融資本の概念と本質」(「経済論双」七七の3)

(註3) 同氏「帝国主義論にかんする覚え書」(京都大学経済学部創立四十周年記念論文集)

佐藤氏における本質と形態と同じような関係に、大乘的規定と小乗的規定があるかのであるが、それだけではない。「銀行資本と産業資本の融合とか癒着」という、佐藤氏のいわゆる「本質」からはむしろ離反しようという志向がみられ、持株会社における支配の論理への傾斜がみられることである。

(註4)

(註4) こうした株式会社論への、いつそうの強い傾斜は、宇野弘蔵氏にみられるのであるが、それは独自の体系を有するものであり、包括的見地からしか検討されえぬものとして、いまはおくほかはない。ただ、一言ふれておこならば、株式会社論への傾斜のさい、金融資本の、いわば実体的内容的側面をなすところの、現実機能資本の性格について、疎略にあつかわれる傾向がある。たんに独占資本というにとどまらず、一方ではコンビネーションの形成により、他方では株式制度によつて諸種の資本を内包しうることとなれば、それ自体、諸種の企業を内容とするひとつの小社会を形成し、かつては圧倒的権力を行使した銀行資本をも克服して自己の内部におさめる、ということは、どのように処理されればよいのか。「帝国主義論」第一章におけるコンビネーションの強調

とあいまつて、解決されねばなるまい。なお、金融資本のこうした側面については、生川栄治氏「金融資本の形成」(信用理論体系Ⅲ149ページ)、「イギリス金融資本の成立」(4ページ)に、独占資本とは区別されたものとしての論述がある。

また、このような株式会社論への傾斜は、同時に、金融資本の生成期における銀行資本の役割をいちじるしく低評価させ、「株式会社制度が普及すれば、すでにそれだけで集中と独占化とは、いわば自動的に進行する傾向を示すであろう。」(武田隆夫編「帝國主義論」(上)23ページ)とのべられるようになり、さらにすすんでは「銀行資本といわれるものが、産業資本という明確な一つの範疇とあい対比してならべられるほどの範疇性をもちうるものか」(遠藤湘吉「金融資本論の現代的意義」『現代の理論』1959年6月、37ページ)という意見すら提出されるにいたっている。

従来の諸議論を以上のように整理してみると、スウィージーらによつて提唱された歴史的過渡的概念としての金融資本が、のちに至つて、むしろ理論的に整理されるべき問題としてうけとめられていることに気づくのである。そして、そのような歴史的な整理の視角と論理的な視角のあいだに、そして両者の概念のあいだに、或るくいちがいがあることもあきらかとなつた。

しかも、そうした議論は、銀行を重視する見解から、いつしか株式会社論へと移行がなされたのではあるが、最も肝要な銀行と株式会社との関係は、いつこう明確にはされなかつたのである。

(3)

金融資本をめぐつて、以上のような議論がなされて来たのであつたが、その問題のすべてを一挙に解決するなどは、思いもよらぬことである。しかし、その一部にもせよ、正確な理解を得るならば、全体も解きほぐされていきはしないか。

歴史の一時期にもせよ、銀行資本が優位にたつということは、どのように理解されればよいのであろうか。以下では、この問題に焦点をあわせることにしよう。

産業資本は、近代的信用制度を形成することで、利子うみ資本をみずからに従属せしめたのであり、そうしたものとして、銀行資本はほんらい、「仲介者

としての控え目な役割」をになうにすぎなかつたはずである。しかし、歴史の展開は、その主導権をいつしか銀行に与え、「銀行の新しい役割」が注目され、銀行資本は産業資本の死命を制するまでの力を得たのであつた。

(註1)

(註1) もつとも、独占体の形成のさい、常に銀行資本が大きな力を持つたなどとはいえない。アメリカの石油業、ドイツの化学工業の例に、あきらかである、(Cf. G. Edwards, *The Evolution of Finance Capitalism*, p. 178., Riesser, *Die deutschen Grossbanken*, IV Auflage, S. 587) エドワーズは、産業証券資本主義として金融証券資本主義から区別している。これらの産業にあつては、そのきわめて初期から独占的高利潤が可能であつた点に留意さるべきである。しかし、こうした二つの道があることについて、いまはこれにふれない。

そこで、銀行資本の産業資本支配を、金融資本概念の重要な部分とみた、ヒルファディングの见解を、まず検討してみることにしよう。

ヒルファディングの「金融資本論」は、それなりの体系を持ちながらも、その論旨にはかなりの混乱が含まれており、一本の筋道をたどつて理解することは容易ではない。とりあえず、彼の云うところをきこう。

「銀行資本と産業資本との諸関係においては、ただ貨幣資本および生産資本の基本的諸形態において見出さるべきであつた諸関係の完成が認められただけであつた。……そこで信用の役割と本質との問題が起されたのであるが、この問題はまた、貨幣の役割が明らかにされたときに初めて答えられるものであつた。……貨幣の正しい分析によつてはじめて信用の役割が、従つてまた銀行資本と産業資本との諸関係の基本的諸形態が認識されえたからである。」

生産資本、貨幣資本とのべられているのは、資本循環 ($G-W \dots P \dots W'-G'$) の内部における資本の生産形態および貨幣形態を意味するものなのであろうが、これをもつて産業資本、銀行資本の關係に等置することは、もとより許されない。第一には、利子うみ資本という範疇の欠除が、第二には、それを管理することを業務内容とする銀行業資本との區別がなされていないことが、指摘されねばならない。貨幣と商品；貨幣資本と生産資本；銀行資本と産業資本、こうしたそれぞれの概念の対応がそれぞれ等置されるという、形態規定性を消失した、直線的ないし平面的構造なのである。

ところで、ヒルファディングにおける銀行資本は、常に産業資本に対して、優越をしめ、優勢であつた。勿論、処々において、反対の内容の言句の挿入が見られるとはいうものの、全体の流れはあくまでも銀行の産業支配の方向にある。では、それをどこから説くのか。

ヒルファディングは、銀行が産業に対して、固定資本調達のための、長期的、大量的、固定的な信用を供与することから説明をはじめめる。

「この種の信用供与が現れるとともに、産業に枝する銀行の地位も変化する……銀行の関心は、もはや企業の瞬間の状態や瞬間の市況に局限されてはいないで、今やむしろ企業のより遠い運命、市場の将来の形態が問題になる。」
(註3)

こうした具体的事情をのべてはいるものの、このことが銀行優位の説明に結びついていくのではなく、かれは全然別の論理から、次のような説明を与える。

「この関係にあつては、銀行が優勢な側にあるのを常とする。銀行は、流動的な随時出勤しうる形態にある資本を、貨幣資本を常に処理しうる。然るに企業は、商品の再転化に頼らされている。……その資本が生産資本、または商品資本として固定されている企業に対して、銀行を優位にするものは、貨幣資本に対する処分力である。」
(註4)

銀行資本が産業資本と区別されるのは、貨幣資本を取扱うという点であり、命がけの飛躍から、実現契機から解放されているからであり、そのいみで優勢をしめるといのであつた。銀行資本がそういうものとしてとらえられた上でのことであれば、歴史上いつぱんに銀行資本は優勢をしめることになるはずである。かつてトラハテンベルグが、ヒルファディングは「貸付資本なる範疇を解していない。彼は、貸付資本を産業資本の一機能形態としての貨幣資本と同一視している。」とのべたが、けだし当をえたものといえよう。

(註5)
こうして、ヒルファディングの理論は、銀行の優位体制という眼前の状況から、いわば直線的に貨幣にまで抽象化し、理論化したのであつて、歴史的に新しい段階の登場に附随したものとしては考えられていない。かれにあつては、銀行資本の機能内容の把握がまず誤つているのであるが、さらに、その機能内容それ自体から直接に優位の理由をとくのは、一般的範疇の操作によつて、た

だちに特殊歴史的な事象を説明することであつて、もとより誤りである。
(註6)

(註2) R. Hilferding, *Das Finanzkapital*, (1955) S. 2. 岡崎訳 (上) 10ページ

(註3) *Das Finanzkapital*, S. 116, 岡崎訳 (上) 150ページ

(註4) *Das Finanzkapital*, S. 118 (岡崎訳 (上) 151ページ

(註5) トラハテンベルグ, 川崎訳「現代の信用及び信用組織」221ページ

(註6) 生川教授は、次のようにのべられている。「銀行が独占すべき自己の『商品』は貸付資本としての貨幣そのもの」であり、それは「他の多数の商品の相異つた使用価値が一般的に抽象化されて、商品経済の限界のなかでの最大の社会性を示す」ものなのであつて、銀行は「社会的に同質化された『使用価値』の所有独占を実現するものとして、他の一般商品生産をなす資本がその集中独占化においてうけとる使用価値からの物的制限を解放される。銀行独占がきわめて少数に集中化された巨大銀行への結晶として、他の諸独占企業を圧倒するほどの強大な権力を保有するにいたるのは、こうした貨幣のもつ特殊社会関係をその根拠とするからにはほかならない。」(生川栄治「金融資本の形成」信用理論体系Ⅲ, 148ページ) 銀行が貨幣を、産業が商品を独占する、という理解にたたれ、貨幣は商品と区別すべき特性をそなえたものであり、したがつて銀行は圧倒的権力者となる、という文意なのであろうか。利子うみ資本範疇を素通りして、貨幣をもつて銀行を把握することの当否、「銀行独占」といわれることの真実の意味などについて、理解し難い点があり、銀行資本の内的機能の正確な捕捉なしに銀行優位をといた、ヒルファディングの誤謬が想起されさえるのである。

こうしたヒルファディングの見解と対比して、レーニンはどのように考えたのだろうか。「帝国主義論」第二章を開いてみよう。

レーニンにおける特徴は、独占規定の重視なのであるが、第二章「銀行の新しい役割」の中心的論点は、銀行資本の独占化と思われる。この章での叙述は、しばしば読み誤られ、産業資本の独占と同じ平面で銀行資本の独占をとらえるという、極めて形式的解釈をうみだしたのであつた。しかし、もしそうであるならば、第二章独自の意義は、どこにもないことになり、第一章で十分なはずである。しかしレーニンの真意はそうではなく、産業資本における独占と銀行資本における独占とを、明瞭に区別したのであつて、その点は注意されねばならぬ。

銀行業資本は、一の企業資本としては、他種の営利企業資本と、なんら異なるところはない。自由競争のもとにあつては、利潤率いかんによつて、銀行業

も増設をみたであろうし、また収益がうすければ、他の業種への移動もありえたはずである。そうした一般の企業資本となんら異なるところなきものとして、銀行業資本もまた、独占化の途を歩んだのである。

その場合、産業資本における独占の意味するものは、特定商品の市場を独占することであり、その独占力の影響は、当該商品の需要・供給の連関においてのみであつて、そのさい銀行資本にかかわるところは全くない。しかし、銀行資本の独占は、これと異なる。銀行資本は貨幣を潜勢的資本として取扱い、その市場を独占するのである。すなわち、いま、銀行のなす貨幣取引の面をふせてみれば、それは潜勢的資本としての貨幣を「商品」として取扱う営利企業資本であり、そうした「商品」の需給における連関の相手側は、なによりもまず産業資本でなければならない。銀行資本の独占は、まぎれもなく、産業資本に対する独占的権力の行使を意味するのである。

(註7)
かれは、そこで「商工業界からは、しばしば、銀行の『テロリズム』に対する不平の声がきこえる」として、ドイツの事例にふれたあと、つづけて「本質的には、これは大資本の圧迫に対する小資本のいつもながらの不平なのであるが、ただこのばあいは、『小資本』の部類に一つの完全なシンジケートがはいっているのである！ 小資本と大資本との古い斗争は、新しい、はかりしれないほど高い発展段階でくりかえされている。」とのべていたのであつた。

こうした産業独占と銀行独占における独占の意義の決定的差異の理解からのみ「全能」独占として、銀行独占は把握されうるのであるが、この点は、従来とかく看過されがちであり、そのいみでは、レーニンの主張は、かなり平面化して理解されて来たといえよう。

(註8)

(註7) 銀行資本の機能などについては、高木暢哉教授「再生産と信用」第五篇参照

(註8) すでに見たように、古賀英正氏にあつては、銀行優位のごときは、単なる形態にすぎぬとして軽くあつかわれた。氏の場合は、銀行資本も産業資本も、同じ企業資本であるという把握にたち、両種の資本の内的機能における差別に、格別の配慮がはられたとも見られなかつた。したがつて、産業独占も銀行独占も、なんら区別さるべき必要もなく、銀行がとくに他種の資本から区別されて演ずる新しい役割のごときには、考察の目をくばられなかつたわけである。こうした銀行資本の内的機能についての分析視角を放棄したうえで、ヒルファディングやレーニンを批判するのでは、十分な理解のうえにたつ内在的批判とは、いい難いであろう。

以上のように、銀行独占の意義が説明されているとはいえ、それがただちに金融資本だなどといわれるのではなかつた。いかに優勢を示したにせよ、それはしよせん銀行資本にすぎず、金融資本ではないのである。とはいえ、銀行独占の成立の上でのみ、金融資本は成立しうるものなのであるが。ヒルファディングの場合についていえば、第14章「資本主義的独占と銀行資本への転化」にいたつて、はじめて、金融資本なる概念が与えられるのであつた。

「かくて、産業の銀行への依存は、所有関係の結果である。産業の資本のますます増大する一部分は、これを充用する産業資本家のものではない。彼らは銀行を通じてのみ資本の処分権を与えられ、銀行は彼らに対して所有者を代表する。他面、銀行は、その資本のますます増大する一部分を産業に固定せざるをえない。これによつて、銀行はますます大きい範囲で産業資本家になる。かような仕方では現実には産業資本に転化されている銀行資本、したがつて貨幣形態にある資本を、私は金融資本と名づける。」
(註9)

ここに見られるように、ヒルファディングの論述は、かつての銀行優位の説明の場合とは異つて、所有関係からとき起さるれ点、注目に値しよう。すなわち、銀行資本は銀行資本なるがゆえに優勢を示す、というかつての論理は姿をかくし、銀行が銀行でありつつも自らを超越しようとする姿を目して、金融資本を説くのである。

独占を志向する過程にあつては、資本の最低規模は増大し、それが社会の分散的所有の枠を越えてゆくのであつて、そうした基礎的な変化に基いて、銀行の貸付は、長期化し、固定化・大量化するのであつた。そのさい、銀行資本は、かつての、産業資本に対する外在的独自性を失つて、銀行資本でありつつも、すでに出資者としての立場にたつ。貸付は出資化し、いまのちに展開する株式会社制度における支配株主の地位を、事実上得ようとさえする。こうした、銀行資本が自らを超え、資本の現実的機能にまで支配が及ぶときの、出資化せる金融を目して、金融資本を説明しようとしたのであろう。こうして、のちに株式会社制度として結実するはずの機構が、先駆的に、銀行と産業との関係において、表現されていたのである。

したがつて、ここでのヒルファディングの説明は、銀行資本の機能内容から

直ちに銀行の優位を説明した、先行せる諸章におけるものとは、区別されねばならないであろう。そしてまた、レーニンが、このヒルファディングの規定を引用しているのも、生産の集積・独占という正しい基礎において理解すれば、そのまま摂取しうるものと考えたからだと思われる。

(註9) *Das Finanzkapital*, S. 335, 岡崎訳 (中) 97ページ

(4)

以上は、銀行に身をよせて考えてみたのであつた。しかし、すでに見たように、従来なされて来た諸議論の整理が教示したものは、銀行と株式会社の関連にこそ、この問題を解くための鍵がかくされているということであつた。

自由資本主義の段階に固有の所有形態は、私的資本主義的所有であり、生産手段は排他的に自然人たる資本家に帰属した。したがつて、そこで株式会社制度が、社会体制的に確立されると考えるわけにはいかない。法人所有は、独占資本段階において顕著な所有形態として、把握されなければならない。それは独占の大資本の成立を可能とし、合理的なものとする所有形態である。そこでは、生産手段は直接自然人に帰属することなく、会社財産として存在し、これに対する経済的実質的な所有権は、株式擬制資本の所在いかんで、定まるのであるが、その株式擬制資本そのものさえ、法人間の相互保有のごときかたちを取つて、いつその非人間化がすすみ、疎外は深化するのであつた。

銀行と産業との特殊な関係は、こうした両段階のあいだに生じたのであつた。銀行資本は独占化することによつて、産業に対して優越し、ついで貸付の出資化によつて、これと合体融合して、金融資本に転化するのであつた。それは、段階間の移行期における逆倒の事態であつて、いずれは、株式会社制度というより高次の所有形態の導入によつて、発展的に解決さるべき問題であつた。

しかし、こうした銀行資本に身をよせての思考に対しては、株式会社論からする反論が生じえよう。すなわち、かつての産業資本は、競争の過程を通じて両極分解し、独占資本と中小資本に分化してゆくのであつて、こうした過程のうちに、支配株主と従属式主の構造も自生的にうまれてくる。つまり、敗退せ

る資本家は、無機能の従属株主に転化するのであつて、株式会社制度は、自動的内生的に、展開しうるはずである。したがつて、はじめから、銀行企業資本の介入を必然とする事情など、ありはしない。たかだか、観念的抽象的に、利子率が与えられておりさえすれば、十分なのだ、とする考えである。こうした、銀行と株式会社という、二つの分析視角相互の関連は、どのように理解されればよいのであろうか。

(註1)

(註1) 資本一般から金融資本へという転化は、ひとつの飛躍であつた。こうした移行の過程を歴史的にあとづけてみると、流通優位という現象があり、またヒルファディングのごとき流通論的経済理論が生じていた。そして更には、上記のような、二つの議論の系譜が存在しうるのであつた。

こうした飛躍の過程を、歴史はすでに経験している。資本制生産への移行のさい、本源的蓄積の過程の展開に伴つて、重商主義理論という、流通理論が世にとわれ、そこでは、商人資本ないしは問屋制度の果たした役割が注目されたのであつた。そしてまた、その時期の理論化にあつては、いわゆる大塚史学とよばれるものと、これに対立する見解とがあり、それは主として、この商人資本の役割をめぐつてのことであつた。しかもさきに考察した、銀行資本が産業資本をとらえ、ついに *de facto* の金融資本を形成するという論理は、商人資本が生産者を支配してゆく五段階(「レーニン全集」3の376ページ)を思わせるものがあるのであつた。

こうした類比は金融資本への飛躍と、そのさいにおける構造全体の旋回とを、明らかにするさいの手がかりとして、有用なものである。勿論、類比は類比の限界をもち、両者の次元の差には留意されねばならぬことではあるが。

この飛躍を、内的に説明し、その旋回する構造の全体をのべることは、以上の考察だけからは、末だなしえない。株式会社についての積極的考察が、果されてないからである。(1962.7)